



一般社団法人 日本LD学会

会 報 第 97 号

Japan Academy of Learning Disabilities

【事務局】 〒108-0074 東京都港区高輪 3-24-18 高輪エンパイヤビル 8F
TEL:03-6721-6840 URL:<http://www.jald.or.jp>

主な記事

<特集>

- ・最近の施策 〈文部科学省〉
〈厚生労働省〉

<連続講座>

- ・就職等における合理的配慮
- ・海外情報

<お知らせ>

- ・2016年度の予定について



「想像」と「創造」

国立特別支援教育総合研究所

海津 亜希子

中学校の授業研究に参加した時のこと。授業に向かうことが難しい子どもも少ないクラス。しかし、その日授業をした先生は、写真や実際の物をふんだんに用意し、子どもたちを惹きつけ続けた。さらには、授業で扱った内容に対し、気づいたことを書き出してみようという課題に、丁寧な机間支援だけでなく、5つ書き出せたごとにシールを貼る技まで飛び出した。子どもたちはまんざらでもないらしく競うように手を挙げていた。シールの効果も否定できないが、それよりも、「よく気づいたね」「なるほど!」といった声かけや、手応えが嬉しかったのかもしれない。

私自身あっという間の50分間の後、研究協議会に移った。明るい気分で臨んだ協議会が次の瞬間、一転。司会の先生が「感想のある方どうぞ」と促しても誰一人手が挙がらない。そこで、授業が行われたクラスの担任の先生が指名された。ある程度の評価の言葉もあったのかもしれない。ただ私が鮮明に憶えているのは、「特別支援教育は認めない。なぜなら特別扱いの教育だから」との一言であった。何をもち「特別支援教育」と言

われたのかは定かでない。だが、あのような授業が特別支援教育を連想させるのであれば、大いに喜びたいくらいである。他方、授業をされた先生は協議会が進むに連れ、下を向き、肩をすくめていった。

こうした雰囲気は残念ながらそうめずらしいことでもないのかもしれない。自分自身も何かに対して、一方的な見方をすることがある。しかしこれでは何も生まれない。何か転換できるきっかけはないか。

とてもシンプルだが、その一つは「想像」だと思う。「自分が助けを必要とする子どもだったら・・・」「困っている子どもの親だったら・・・」そんな想像を巡らせると、自ずと視界が開け、自分がすべき一手がみえてくるように思う。そして、このような「想像」が次にもたらすのは、「こうしたら伝わるかな」「もっとこうしてみよう」という「創造」である。「創造」は、周りだけでなく、自分をも豊かにしてくれる。

最後に、研究授業の真の評価は言わずもがな。子どもたちの様子参照ということで。